

## 「おかえりなさい」に込められた心

北京科技大学 洪子画

「おかえりなさい」、この言葉を見た瞬間、私の心は暖かくなりました。

今年の夏休みに、私は念願だった日本に旅行に行きました。成田空港に着いたとき、大きくはっきりと書いてあった「おかえりなさい」が目に入りました。これは帰国してきた日本人のために用意された言葉のはずですが、外国人の私にとっても、何だか安心感が生まれました。どうして私はこの言葉に引き付けられたのでしょうか？考えてみれば、中国では、帰った人にかける「おかえりなさい」のような 決まった挨拶言葉はないからです。

人間にとって、家が一番欠かせない存在で、一日のはじめと終わりの場所です。一日中苦勞して、いろいろな人に出会って、ときどき難しくつまらない仕事に振りまわされます。疲れ果てた私たちは家に足を向けます。ドアを開けて、「ただいま」と言って、「おかえりなさい」の返事が聞こえたら、背負っている重荷を降ろしたような気がして安心できるでしょう。

また、このやりとりは家族の存在をお互いに確認する合図でもあります。ある日、父が仕事から帰ってきました。自分の部屋にこもっていた私は父に何も言いませんでした。みんなでご飯を食べ始めたとき、父が「なんで何も言わなかったの？俺が帰った時に」と文句を言いました。「えっ、何のこと？」と私は答えました。父に何も言わなかった私は、そのとき何も不自然を感じていませんでした。父がこんなに小さいことを気にしているの、私は驚きました。両親が帰った時に、もし私が暇だったら、ちゃんと挨拶をしますが、もし私が何かをしているなら、私は両親に何も言いません。これはもう私の習慣になっていることですが、父はそれに慣れてないようです。

昔から私は家族が帰ってきたときに何も言わなかったのでしょうか。父が帰ったとき、うれしくなって、「パパ」と呼んでよろこんだ記憶がありますけど、なぜ、いつ、私は「マナーモード」になったのでしょうか。

子供の頃、話せるようになったばかりの時、私は何に対しても強い興味を持っていたので、話す機会を絶対見逃さなかったです。両親の帰りを楽しみに待ち構えていたのです。年齢が上がるごとに、どんどん冷たくなったわけではありませんが、ただ口に出したくなくなりしました。たぶん子供みたく熱心な言い方は、私にとってちょっと恥ずかしいのかなと思います。「パパ」の代わりに挨拶の役割を果たす中国語を探そうとしても、残念ながら、私の気持ちにピッタリ合ったものはなかなか見つけられません。

だから、日本語の「おかえりなさい」という言葉は素敵だと思います。「おかえりなさい」はただの挨拶言葉だけではなくて、交流の始まりでもあります。私が何も言わないばかりに、帰宅した両親との交流が始まりません。それならきっと、両親は家族で共有したい気持ちが冷めていくでしょう。帰る途中で心の中の思いを伝えたいと思っていたかもしれません。しかし、家に帰って、冷たい私に向かい合ったら、口がなかなか開かなくなってしまうでしょう。

たぶん多くの人は、親しい人に「おかえりなさい」を言わなくても大丈夫、こんな些細なことは問題ではない、と思っているでしょう。しかし気持ちというものは人を繋ぐ大切なものです。逆に、小さなことでも注意して、相手のことを考えて、言葉を使って、気持ちを伝え合わなければならないのです。

成田空港で私が感じた「おかえりなさい」の暖かさは、私にとって忘れられないもので、家族とのコミュニケーションについて考えるきっかけをくれました。これから私は、「おかえりなさい」の暖かさが伝えられるように、心を込めた言葉をかけて、家に帰ってきた両親を迎えていきたいです。